

吸血鬼姉妹の兄となり
ましたが、ディオ様なる
のは色々と間違ってる
と思います。

すうばあれたす

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

この物語は、石仮面にまつわることのない、一人の男の、奇妙？な冒険譚である。

目次

原作前：ディオ・ブランドーではない	
！このディオ・スカーレットだ！	
あたーらしいーいあーさがきた。↓もう	
見れない	1
Q. 能力は？ A. こうなるとは思いま	
せんでした。	5
冷えたワインが飲みたい。↓あれ、こ	
れできるんじゃない？	13
ディオ「最っ高にハイつてやつだあ！」	18
れみりあのおにいさま	25
はじめてのおつかい（狩）	29

ディオ「おお、神よ！今だけあんたに感謝します！」	35
ディオ「オレは『正しい』と思ったから	
やったんだ。後悔はない…こんな世界と	
はいえ、オレは自分の『信じられる道』を	
歩いていたい！」	42
NEW MEMBER 初めてのトモ	
ダチ	51
ディオ「我が会の総力を持って当たれ	
！」紳士たち『イエツサー！』	63
あ！やせいのもんばんがあらわれた！	78

原作前：ディオ・ブランドーではなーい！このディオ・スカーレットだ！

あたーらしいーいあーさがきた。↓もう見れない

「おぎやあ！おぎやあ！」

とある紅い館の一室で、赤ん坊の鳴き声が響く。

「カルナ様！アラン様！おめでとうございます！立派な男の子ですよ！」

「ほんとうか！よくやったぞカルナ！男の子だ！」

「ええ、本当に…よかった…」

「では、この子の名前は、」

「一緒に決めたあの名前でしょう？」

「『ディオ・スカーレット』」

side???

あ、ありのまま今起こっていることを話すぜ…

「布団にくるまって寝て、目を覚ますと赤ん坊となつて産まれていた。」

な…何を言ってるのかわからねーと思うが、俺も何をされたのかわからなかった…
頭がどうにかなりそうだった…

悪夢とか超常現象とかそんなチャチなもんじゃあ断じてねえ

もつと恐ろしいものの片鱗を味わったぜ…

え、マジで何コレ？

なんで赤ん坊になつてるの？思わずポル○レフさんみたいになっちゃったよ？

てか今、『ディオ』って呼ばれたような…

ディオと聞いて、思い浮かぶのはやつぱり

『ジョジョの奇妙な冒険だろ。』

でも、なんか名字が違った気もするが…

《キング・クリムゾン！》

side デイオ

どうも。デイオです。

生まれてから、早くも5年程経ちました。5歳です。

え、展開が早い？気にするな！

あれから、いろいろな事がわかりました。

一つ目。

自分の生まれた家は「スカーレット家」という、名家らしいです。

二つ目。

父アラン、母カルナ、そして自分も、

【吸血鬼】だそうです。

さて、ここまで説明すれば、もうお分かりでしょう。

この世界は、【東方Project】の世界だということをお!!

さらにさらに！今なんと！あの吸血鬼姉妹のお宅ですよ！やったね！

これで、念願の「お兄様」が聴けますよ！ヒヤッフー！

はいそこ、変態とか言わない！男はみんな、変態なんだ！変態という名の紳士なのだ

!

…熱くなりすぎた。

初めはジョナサンと因縁の対決をするかとヒヤヒヤしてたけど、

これで、吸血鬼ライフを楽しめるね！

でも、浮かれてばかりはいられませぬ。

未だにわかんない事もあります。

何でここにいるのか、ですぬ。

よくある神様からのお手紙もなし、お告げもない、そもそも神様？に会ってない！

ほんとに、何でここに来たんでしょーね？

ま、多分ディオという名前は偶然でしょうね。

金髪なのも、母譲りだと思います。

顔も、父に似てるしね。

ただ、一つだけ違うのは、まだ羽がないんですよね…

小さい頃はないんでしょうか？

Q. 能力は？ A. こうなるとは思いませんでした。

「ディオ、いるかい？」

「ここにいますよ、お父様。どうかなさいました？」

「うむ、実はな、そろそろお前の能力を出そうと思っっているのだ。」

「能力…ですか。」

「ああ。お前がどんな能力かが楽しみだな！」

「わかりました。どこでしますか？」

「そうだな、今日の1時に、中庭で始めるから、遅れないようにしなさい。」

「わかりました。」

sideディオ

どうも皆さん！ディオです！

いやーついに来ましたね！能力がわかる日が！

楽しみだ！一体、どんな能力が来るのでしょうかね？

そういえば、父と母の能力がわかったんですよ!

はつきり言ってチートだと思えますよ、ほんとに。

どんな能力かというと、

父アラン：「磁力を操る程度の能力」

たいしたことないじゃん、と思ったあなた、甘いです。甘々ですよ。

ただ、磁力を使うだけでも、かなりすごいですよ?

どこぞのビリビリ中学生みたいに、レールガンもどきが出来るんです。しかも、砂鉄を利用してどこでも武器を生成できますし、

カー〇様みたいに、砂鉄が動くことで、おかしい切れ味を生むんです。

さらにこの能力は、磁力を与える事も可能なんです。

わかりましたか?このチート性能を。

例えば、相手にS極、石にN極を与えたとします。

こちらから石を投げたとします。当然相手は避けますよね?

すると、石が自動で追尾して、当たります。

もうわかりますよね?攻撃が百発百中何です。

なにこのチート。

母カルナ：「しまう程度の能力」

見た目に騙されなくてください。チートです。

これの主な使い道は、収納です。しまっちやいます。

ココ・ジャンボとかみたいですね。

おまけに何でもしまえます。大きさ？関係ありません。

つまり、どんな範囲技が来たとしても、しまっちやいます。

そして、お返しとばかりにしまった技を取り出して放ちます。

この人に、遠距離は効きませんね。しまっちやうもの。

逆に、しっぺ返しどころか、overkillされますね。

まあ、チートなんですよ。子もチートなら、親もチート。これことわざに出来るん

じゃないんでしょうか。

—————

いよいよやってきました。夜中の1時です。

こうして、自分の能力がわかるわけですね。

何がくるんでしょう？

「ではデイオよ、今からお前には、能力を手に入れてもらうが、そこで大切な事がある。」

「何でしょう?」

「いいか?大切なのは、イメージだ。自分の中の深層に入っていくようにイメージするのだ。」

「イメージですか…わかりました。」

「それともう一つ。危険な能力もあるが、それはすぐにわかる。その時は、すぐにやめること。取り込まれて、おかしくなる事もあるらしいからな!まあ、大丈夫だろう。」

え、なにそれこわい。ま、多分大丈夫でしょ。

とりま、イメージしてみますかね?

（イメージ…イメージ…）

とにかく、潜るように…

（イメージ…イメージ…）

深く、深く。

（イメージ…イメージ…）

そうだな、目の前にいるような、大男をイmってファツ!?

「うわあああああ!!」

「どうした!?なにがあつた!？」

び、びびつた、いきなり目の前に黄色い大男が出てくるんだもん。何事かと思つたわ。

「いえ、何でもありません。驚いただけです。」

「そうか。なら良かった。で、どうだったのだ?何か見えたか?」

「それが、よくわからないんです。黄色い大男がいたとしか…」

「うーむ、すまないな。全くわからない。」

「そうですか…」

「まあ、気にすることはない、能力がすぐに出るとは限らないのだからな。今日は終わろ

う。また明日だな。」

「わかりました。では、おやすみなさい。」

「ああ、おやすみ。」

「ふう。」

ため息をつくつと、ベッドに飛び込む。

ああ〜、こころがびよんびよんするんじや〜

「しかし、あの大男は何だったのだ?何だか、どこかで見た気もするんだが…まあ、詳し

くは明日だな。」

そんな事よりも、水が飲みたい。もう喉カラカラなんだ。

水っ！飲まずにはいられない！

「あー地味に遠いな。届いたらいいのに。なんてな。」

瞬間、目の前に世^{ザ・ワールド}界が、コップと水差しを持って、こちらを見つめていた。

(。D)・・・

(つD)ゴシゴシ

(；D)・・・

(つD)ゴシゴシゴシ

(；D)：!?

アイエエエエ!?ザ・ワールド!!サン、ザ・ワールド!!サンナンデ!?

そ、そうだ、素数だ、素数を数えよう。

2、3、5、7、(長くなるので割愛)

97、あー！落ち着けねー！

何で、ここに、世界ザ・ワールドがあるんだ!?!ここ東方だよね!?!何でいるんだ!?

あ

これって、もしかして…

(回想開始!)

び、びびった、いきなり目の前に黄色い大男が出てくるんだもん。何事かと思ったわ。
(回想終了!)

あれかー!

あの時かー!うつわ、マジで?え、何、もしかして他にスタンド使いがいるのか?

何故こんな心配をするかというと、ジョジョを読んだ人なら知っていると思うが、スタンド使いは引かれ合うというものがある。

もし、自分の他にスタンド使いがいたら…

『ヒヤッハー!このガキはいただくぜー!』

『お兄様！お兄様ー！』

よろしい、ならば戦争クリュークだ。

絶対にそんな事はさせない。妹を可愛がってもいいのは俺だけだ！

例えどんなヤローが来たとしても、ぶっ〇してやる！

いや待て、まだいると決まったわけではないな。とりあえず、父に聞いてみるか。もしかしたらいないという可能性があるからな。

冷えたワインが飲みたい。↓あれ、これできるんじゃないやね
!?

「今日でディオも20歳なのね」

「そうだな、よしディオ！今日はともに酒を飲んでみないか？お前は何故か酒は20になるまでは飲みません、なんて事を言っていたからなあ。

つ、ついに息子と夜を明かす日が来るとは……ううっ（；ω；）」

「あなた、私達はいつも夜を明かすでしょう？人間みたいな事を言っていないで、早くディオの誕生日を祝いましょう？」

「そうだな。じゃあ、せーの……」

「20歳おめでとう、ディオ！」

「ありがとうございます。お父様。お母様。」

sideディオ

ハアアツピイイバアアアスデエエイトオウウウミイイ

どうも！今日で20歳となりました！

ディオです！

なので今日はバースデーパーティーです！

ワインとかのお酒は飲もうと思えば飲めましたが、やはり元日本人なので、20歳になつてからにしようと思つたんですよ。

でも、そんなのもう関係ない！酒！飲まずにはいられない！

—————

「どうだい？初めての酒は？」

「おいしいです。ただ、ぬるいんですよ。今は氷がありましたっけ？」

「ごめんなさい、ディオ。今日はその酒好きが使い切ってしまったの。だから今日は我慢してちょうだい？」

「うぐつ、す、すまんなディオ。」

「そうですか…川で冷やそうにも汚いでしょうし、仕方ないですね。」

ないのか…あー夏だから氷入れて飲みたかったんだけどな

ちなみに、何故製氷技術がないのに、うちでは取れるのかというと、昼間に母が取り

に行ってます。

え、太陽で焦げて死んでしまう？何をおっしゃいますか（笑）

あの人は何でもしまえろと言ったじゃないですか。

だから、氷は溶けないし、昼間の日の元でも活動できるんですよ。

ちなみに、母はマジギレすると、しまっていた太陽の光を放ちます。

ははわつよい。これ大事。

でも、その太陽の光を浴びて、生き残ってた父も大概だと思えます。

何で両親はこんなにチートなんでしょうか？

川で冷やしたいんですけど、このころのヨーロッパの排泄は、窓からポイ捨てだった

くらいですからね。衛生面が悪いんですよ。

体は壊さないでしょうけど、精神的に…ちよつと…

あーでも、氷が欲しいなく

冷凍庫の残りでもいいから欲しいなー

あー…

ん!?

冷凍!? そうだ、冷凍って言ったらあれが今の自分が出来るかもしれないんだ!

気

化

冷

凍

法

が

「そうだよ、吸血鬼ならできるやん!

よし、やってみるか。腕の水分を抜くイメージで:

パキン!

やべ!? やりすぎた! カップごと凍っちまった!

「ディオ…」

「あ、なんか怪しまれてる。これは、つん「さっすが! 私達の息子だな!」

「翼がない代わりに、まさか体を操れるなんて、やはりうちの子は最高ね!」

「…いや、そこは違うところを気にしましょうよ…」

「そんなことよりも、今、母がとんでもないこと言いやがったぞ!」

「翼がない。」こ、これは非常に重要な問題だ。これがないだけで、自分の今後に関わってくる。まずい、非常にまずい。だって、想像してみてくれ。

『おにいさま! きょうもおそらのとびかたをおしえて!』

『ああ、いいとも。今日こそ飛べるといいな?』

『ムウ。ぜつたいにとんでみせるもん!』

こんな事ができないんだぞ!!!うわあああああああああ!!!
もう嫌だわ、死のう。(錯乱)

ああああんまありいだああ

。・。(ノ口、)・。

ああ、なんか気化冷凍法が覚えられて嬉しい半分、
夢が減って悲しい半分、中途半端だ…

デイオ「最っ高にハイってやつだあ!」

どうも皆さん! デイオです!

ついに産まれて、100歳になりました! が、まだまだ体はピツピチですよ! え、なに? 男が言っても気持ち悪い? 知ってた!

今どこにいるかという、街に来ていきます!

デイオが夜中の12時をお知らせいたします。良い子は早く寝ましょうね! じゃないと

「血管針ぐさー」(小声)

「ぎやあああああああ…」

「ひいっ!?!」

こんな風に、吸血鬼に血を吸われるかもしれませんよ♪

あ、でも可愛い子とかだったら吸われてもいいかも、やつぱりダメ。

「で、テメエはなにもんだ!?!」

「私か? 私の名前はデイオ。なに、覚えてもらわなくて結構。貴様のような下等な人間などに覚えてもらう必要もない。」

「うるせえ！死ねえ！」カチャッ

いやいや、お前が聞いたんだろ。てかそんな銃おもちゃで殺せるわけないじゃん。普通に食らってもノーダメージなんだが。

よし、せっかくだし、コイツはビビらせてからにしよう。最近は使ってなかったしな。何秒止められるかみたかったし。

「死ねっ！」パァン！

「ザ・ワールド世界！時よ止まれ！」

1 秒経過

まずは弾丸を掴む。

2 秒経過

血管針を、コイツに突き刺す。

3 秒経過

ゆっくり

4 秒経過

ゆっくりと

5 秒経過

コイツの後ろに立ち、

6 秒経過

「そして時は、動き出す…」

「グエツ!! (コイツ、いつの間に!?)」

「そうだ、君のくれたプレゼント、私には不要だから君に返そう。ほら、君のくれた弾丸だ。」

そう言うときデイオは、弾丸を男の手に渡す。

(ま、間違いないねーん、コイツは俺の撃ったタマーな、何でこのヤロー…が…)

「ああ、それと、会話をするときはあまり不適切な言葉は使つてはいけないよ? まあ、もう聞こえてはいないだろうが。」

デイオがそう言うとき、支えを失った男はゆっくりと、眠るように崩れ落ちた。

「どう今の! デイオつぼくない? (台無し)」

いやー久々にやったけど、やっぱり伸びてるね!

確か20歳の頃で1秒くらい? 50を越したあたりで3秒だったけど、

順調に伸びてるな! まだ9秒は無理だけど!

ちなみに、今血を吸った彼らはクズです。まあ、人には言えないようなことをしていた、とだけ言っておきます。

まだ、罪のない人を吸うのは申し訳なくて……自分で選んで吸ってます。偽善ですけど。

—————

さてと、とりあえず血は吸ったし、お家へ帰りますかね！

ん？なんか飛んできたな、あ、あれは父の手紙か？でもなんで今急に？（ちなみに、手紙は例の能力で飛ばしてきてます。あの手紙はN極で、こっちはS極にしてあります。ほんとに応用の効く能力なこと。）

なにになに？

『デイオへ。』

この手紙を読んでいるということは、おそらくあなたは今から家に帰るところでしょう。

そんなデイオに大事なお知らせがあります。

あなたの妹が産まりました！（*≡▽≡*） b

今、デイオは「ふっ、ふざけんな！なんでそれを言わなかった！」

と言ったでしょう。

お父さんは何でもわかるんです! (・ω・) キリッ
早く帰って来なさい。妹がまつてるぞ (▽)()

お父さんよ

り♪

(顔文字は、デイオの中のイメージです。)

よし、とりあえず親父とはO☆HA☆NA☆SIしないといかなくなつたな。

「ただいま戻りました。」

急いで母の部屋に行く。早く見たい!

「お帰りなさいデイオ。ほら、あなたの妹よ。」

「うー☆うー☆」

かっ

れみりあのおにいさま

わたしはれみりあといえます。

わたしはことしで3さいになりました！

このまえおとうさまに

「レミリアは《おとなのれでい》に近づけたな！」

といわれました。《おとなのれでい》とはなんなのでしょう？

こんなときは、ものしりなおにいさまにきいてみようとおもいます。

—————

わたしのおにいさまは、デイオおにいさまといえます。

おにいさまはいつもかっこいいです！

このまえも、おさらをおとしてしまったときに、おにいさまはすべてのおさらをもっていました！どうやったのかわからなかったけど、やっぱりおにいさまはすごいとおもいます！

ほかに、おさらをとぶれんしゆうのときにあぶなかったことがあったのですが、おへやのなかにいたはずのおにいさまが、わたしをだっこしてくれました。おにいさ

まはほんとうにすごいです！

そのあとに、わたしにとびかたをおしえてくれていたおとうさまをつかんで、

「レミリア、お兄様は今からお父様とO☆HA☆NA☆SIしてくるから、いい子にして待つてなさい。」

といつて、おとうさまをつれていきました。

そのあとは、おにいさまがおしえてくれました。おとうさまのちのにおいがしましたが、きのせいだとおもいます。だって、おにいさまはいつもどおりやさしかったです。

—————
いまならおにいさまは《としよかん》にいるとおもいます。

「おにいさま、いる？」

「どうかしたかい？レミリア。」

やっぱいいました。きょうもおにいさまはむずかしいほんをよんでいます。きょうは、『妹に嫌われないための方法百選』というほんをよんできました。きつと、すごいむずかしいほんをよんでるんだとおもいます。

「おにいさま、《おとなのれでい》つてなにかしってる？」

「大人のレディ？ふむ…」

おにいさまがかんがえはじめたようです。きつとすごくかんがえているんだとおも

います。おかがまつかだもん。

「そうだな、いいかいレミリア。大人のレディとは、かつこいい女の人の事を言うんだ。」

「おんなのひとなのにかつこいいの?」

「そうだ。大人の女の人は、かつこいいんだ。例えば、カリスマに溢れている、というのかな。」

「かりすま…」

かりすま、なんてかつこいいひびきでしよう! さすがはおにいさま、なんでもしつてました!

「レミリアも大人のレディを目指すなら、かつこよくて、カリスマに溢れた女の人を目指しなさい。」

「わかったわ! おにいさま! わたし、おとなのれでいをめざしてがんばるね!」

よし、わかったらさっそく《かりすま》をいっぱいいてにいけないと! できるおんなはいそがしいのです!

—————

side デイオ

レミリアが部屋から出ると、残りは私一人になった。さて…

レミリア可愛EEEEEEEEEEEE!

何あれ、天使ですか？吸血鬼なのに天使？最高だな！

もうあれだね、グレートですよ。

やはり、うちのレミリアはかわいいですね。まる。

ほんと、『俺の妹がこんなに可愛いのは当たり前。』って本出してやれるレベルですね。
ほんとに妹は宝ですね！

はじめてのおつかい（狩）

「レミリア、今日は一人でお使いをお願いしてもいいかな？」

「一人で行くの？」

「そうだ。今日はやることがあつてね、いけないんだよ。」

「どうしても、ダメ？（上目遣い目がウルウル）」

「すまないな、レミリア。じゃあ、気をつけて。」

「うー！仕方ないなあ。じゃあ、行ってきますお兄様。」

「ああ、いつてらっしやい。」

「ゴフツ…れ、レミリアに嘘をつくのは辛いな…でも可愛かった…」

—————
どうも皆さん。ディオです。

私は今、満月に照らされている街に来ています。え、忙しいんじゃないって？忙しいですよ。こうして今もね、愛しのレミリアをスト・オホン。見守っているんですから。それに、今日はある意味試験のようなものなんです。

今日のお使いは、初めて一人でやってもらおうと思います。

もちろん、今回は街の中にいるへん：紳士の皆さまにも協力してもらい、完全なセキュリティでレミリアを護衛していきます。

ちなみに紳士のみなさんは、街中でレミリアの写真を眺めてたら仲良くなった人や、本を買いに行った際に気があつて仲良くなった人もいます。どんな本かのご想像に任せします。

あ、ちなみに今回の紳士のみなさんはもちろん吸血鬼です。合計百人近く。これで安心です！

sideレミリア

どうも皆様。レミリアです。

今日は街におつかいに来ています。

初めて一人でするので、とても緊張します。

おっと、早速見つけました。男の人のようですね。まあ、一息にやつちやいましょう。

「……やつ！」

手刀を叩き込みました。

が、その手は掴まれていました。

「ガアッ!!!」

「ッ!？」

男は私の手を掴んだまま、片手で地面に叩きつけました。

「グウッ！」

叩きつけられると、ある事に気がつきました。

…男の頭が、狼になっていました。どうやら、ウエアウルフ人狼だったようです。

そして、次に目に入ったのは、男の爪が私の胸にめがけて向かってきているところでした。

「ごめんなさい…おにいさま…。」

爪が刺さる事を覚悟して、痛みを待っていました。

「おにいさま…?」

「おにいさま…?」

…ハッ!? しまった! レミリアのことを忘れていた!

「大丈夫か? Rem 「うわあああああん!!! 怖かったあああ!!!」…」

「ごめんな、レミリア。怖かったな。よく頑張ったな。」

「ヒック、ヒック、うええ」

今日の事は、絶対に忘れない。もう二度と、こんな事をしないためにも。

「今日は一緒に帰ろうか。そうだ、おんぶをしてあげよう。」

「ヒック、ぐす、ぐん!」

ディオ「おお、神よ！今だけあんに感謝します！」

「では、ただいまより『紳士諸君による、紳士諸君のための、紳士諸君の会合』の第千三百十回目を始める。今日の進行もいつも通り、『紳士の会』会長である、このディオ・スカーレットが行う。では、今日の議題について、副会長、報告を頼む。」

「どうも、副会長のクオーク・カルバンです。それでは早速ですが、今日の議題を発表したいと思います。」

「() ㊦() ㊦ドウルルルッ！

「() ㊦() ㊦ドウルルルッ！

「() ㊦() ㊦ドウルルルッ！

「() ㊦() ㊦ドウルルルッ！

「() ㊦() ㊦ドウルルルッ！

デデン！

バアアアアン!!!

【会長に、また妹ができる件について】

「」「」「ああああんまありいだあああ!!!」「」「」

どうも皆さん、デイオです!

今日は見えての通り、この前の紳士達と、人間の紳士達で会合をしています。あ、ちなみに人間の私たちは私たちが人外と知っています。でも大丈夫です。私達の事を他言無用にする代わりに、夜中に私達が必要なものを、外から取ってきてあげてます。薬草とか、いろいろね!まさしくwin-winの関係でしょう?

そして、見て分かる通りに、

リアル妹が持てねえ野郎どもに、自慢してます。

m9(ハハ)プギヤー!wwwwwwwwざまあwwwwwwww

遠くからようしよ 眺めてるだけの貴様らと違って、俺は合法的に妹をWRYYWR
Yと可愛がれるんだよこの間抜けがあー!

「会長、テメエふざけんよ!!!」

「俺らは持てないからって、自慢してんじゃねえぞタコ!!!」

「だあつぷ!」

「かわいい…」

うん、レミリア、君も可愛いよ!

「フランはお母様と、お兄様の髪の毛の色と同じなのね!」

「ふふ、だったらレミリアは、お父様と一緒にだな。」

「うーん、お父様もいいけど、お兄様達と一緒によかった!」

「グフアアアツ!!!」

あ、倒れた。でも多分これは…

「レミリア、冗談はやめてあげなさい。お父様が今にも灰になりそうだから。」

「はーい。ゴメンね、お父様♪」

「ううう、よかったよおお。(; ω ; ;)」

お、復活した。

――――
さて、今回はしっかりと立ち会えてよかったな。

デイオ「オレは『正しい』と思ったからやったんだ。後悔はない…こんな世界とはいえ、オレは自分の『信じられる道』を歩いていたい！」

パラ……………パラ……………パラ……………

とてつもなく広い大図書館。

そこには、世界中から集めた、数多くの本が眠っている。

よくある小説から始まり、多くの種類の図鑑や、誰かの研究本。さらには、黒魔術についての本や、強力な封印が施されている本まで、さまざまである。

ここは昔、本好きだったスカーレット家の主が、世界中の本を読むために作られたとも言われるし、昔にいたとされる司書の手によつて増やされたなどと数多くの噂があるが、その実態は定かではない。

そして、その図書館には今、一人の男が、本の山に囲まれて読書をしていた。

「ふむ…つまり、取り込まれてしまうというのか…」

男はなにやら調べ物をしているらしい。その証拠に、その周りの本の山のジャンル

が、あるものでまとまっていた。

『能力』

それは、この世界ではたまたに見られる、特殊能力のことだ。

能力は、その使用者に力を与える。火を操る力、身体能力を変える力、はたまた星を動かす力もあるかもしれない。

多くの者が力に目覚め、そしてその力を使っているのだ。

だが、すべての力が利益を与えるとは限らない。

時には、能力者のものを、家族を、友を、または、能力者の命さえも奪うことがあるのだ…

side デイオ

どうもみなさん。デイオです。

今、私は図書館にいます。

なぜかというと、調べ物をしています。え、なぜかって？

家族を守るためですよ。このままでは家庭が崩壊し、スカーレット家の家の存続に関わってくるのが、一つの理由です。

もう一つは…

レミリアとフランに、悲しい思いをさせないためだああああ!!!

だって、天使だよ？家の、いや吸血鬼の中の癒しだよ？あの笑顔が変わって、悲しい顔してみ？数多くの紳士の命が失われるよ!!!なんせ、「かわいいは正義ジャステイス」の精神のもと、あらゆる者ようし、よを愛し、そして見守るイエスロリータ、ノータツチことを常に考えているような人たちですよ？

てるてる坊主が増えるわ！

それを防ぐためにも、必ず成功させねば！

妹の笑顔は、俺が守る！

《キング・クリムゾン！》

どうも皆様、ついにこの時がやってまいりました。

今日何をするかというと：

「お兄様！フランの能力は何になるんだろうね？」

「フフ、きつと素晴らしい能力だよ。」

「そうよフラン、楽しみにしていなさい！」

はい、これです。フランの能力を出すんです。

もうお分かりですね。あ・の・能・力・が目覚めるんですよ。

つまり、

能力が出る。

←

「き、危険だあ！」

←

ふらんたそ、監禁DA☆

←

フラン は 目の前が真っ暗になった！

←

狂う。

そんな事はさせませんよ。

妹を守るためなら、俺はそのふざけた設定をブツ壊す！

さて、始まってから10分経つが、まだ動きはないな。

こなま何もn「アアアアアアアアアアアアアア!!」って、いきなりかよ!

「フラン！」

「チイツ！世界！」
ザ・ワールド

さて、素早く終わらせるぞ。

世界ザ・ワールドは、スタープラチナほどではないが、精密動作性はB。つまり、常人以上は精密だ。その動作性でまずはフランを気絶させることが必要だ。そして重要なのは、その方法！

腹を殴る：パワーAで殴ると、まずモザイクが必要になる。それに、俺に妹を殴れというのか!? 要するに死ぬと!?

首トン：パワーAでは、チョンパしてしまうかもしれないので却下。（ちなみに、リアルでやると首の骨が折れる可能性があるから、よいこ

のみんなは絶対にしないでね！By作者）

そうすると、残る手段は限られてくる。比較的ダメージが少なく、そして確実にオとせる場所、そこは

「あごの先だあつ！」「無駄ア！」

今、フランには脳震盪を起こした。

なんで顎の先？と思うかもしれないので、ちよつと説明。

そもそも脳震盪とは、脳が揺さぶられることによつておきる、一時的な機能障害のことだ。

そして、今殴つたのはあごの先。なぜこのあごの先にしたかというと、理科室にあるような骨格見本などを見ればわかるが、頭と首がくっ付いている場所は頭蓋骨の真ん中あたりにある。

つまり、頭は頭蓋骨の中心辺りで首の骨の上に乗つかつてる、ということだ。

だから中心から遠いところに衝撃を与えるほど、てこの原理で揺れ幅が大きくなり、脳に少ない力で、脳震盪を与えられる。これを利用して気絶させた。（ちなみに、リアルではしないでください。まず成功するかが怪しいし、成功したとしても脳震盪でなんらかの障害が残る可能性があります。By 作者）

とりあえず、これで応急処置は完了したし、フランが目覚めるのを待ちますか！

—————

sideフラン

「ん…」

なんだか頭がぼーつとする…

「目が覚めたかい？フラン。」

あれ？お兄様？そういえば私、なんで寝ていたんだっけ？…!!!

「お兄様！お父様は!?!お母様は!?!お姉さまもどこ!!！」

そうだ、私は能力を出そうとしたら、みんなが血まみれで倒れていて、私一人だけになっっているところが見えて、そうしたら黒いのが私を追いかけてきて…

「大丈夫だよ、フラン。みんなちゃんというよ。どうかしたのかい？」

「うん、実は…」

《キング・クリムゾン！》

—————

「それでねツ、夢を、見て思ったの。私が…私がみんなを壊しちゃったんじゃないのつて。…怖い。怖いよ。お兄様。みんながね、私のせいではなくなっちゃうのが。ねえお兄様、もしかして私、いらぬ子なのk「そんなことあるはずがないだろう？」…ええ？」

「フランはみんなが嫌いかい？」

「ううん、そんなことないよ！だって、お父様も、お母様も、お姉様も、お兄様も、みんな優しいもん！」

「じゃあ、いけない子には優しくするかい？」

「あ……」

「フランはね、みんなの大事な家族だ。そしてフランも、家族のみんなが大事だろう？いなくなるなんてことはない。そして、壊してしまうのが怖いなら、守ってあげればいいんだよ。」

「守って……あげる？」

「フランが力で壊してしまうのなら、その力で守ってあげればいい。簡単なことじゃないか。」

「そっか、心配なんて必要なかったんだね。だって、お父様も、お母様も、お姉様も、お兄様も……みんな嫌いになんかならないもんね。もしも、壊してしまう力だとしても、その力でみんなを守ってあげればいいんだよ。」

「ありがとう、お兄様！」

「いいんだよ、フラン。さあ、ご飯を食べに行こうか。」

「うん！」

50 ディオ「オレは『正しい』と思ったからやったんだ。後悔はない…こんな世界とはオレは自分の『信じられる道』を歩いていたい！」

sideディオ

ふう、これで大丈夫だな。

やっぱり、可愛い子には笑顔が一番ですよ！

みてみ、このフランの笑顔！仕草！そしてこの存在感！

オアシスですよ。ホントに。癒されるわあ〜（▽）俺の妹が可愛すぎてなんもいえねえ！

NEW MEMBER 初めてのトモダチ

side???

「ハア、ハア、ハア、ハア……」

もうどれくらい走ったのだろうか。かれこれこの鬼逃ご走つこ劇は、少なくとも二時間は続いている。

いたかー！

いや、みあたらねえ。くそ、あのガキは一体全体どこ行っただい！

いいか、早く見つけて殺せよ、魔女のガキだからな。逃がしたら俺らが殺されちまうぞー！

相手にとっては、私に逃げられては困るだろう。だが、私だってわざわざ捕まって、自らの命を失いたくはない。

「見つけたぞー！」

「ッ!？」

やばい、見つかった！早く遠くに……行かせねえぜ？お嬢ちゃん。よくもまあ、こんなにてこつらせてくれたねえ？」

くそっ！私はこんなところで死ねないのに！

「なあ、お前ら。こいつさあ、ぶっ殺す前にさ、ちよつとだけつままねえか？」

「はあ？何言ってるんだ？」

「確かにこいつは魔女だけだよ、なかなかいい体してるじゃねえか。ちよつとくらいつまんでもバレねえって！」

「まあ、顔も悪くねえしな…」

ああ、私はこんな奴らに弄ばれて、ゴミのように捨てられて死ぬのかな。家も、友達も、家族も奪われて。

ろくでもない、つまらない人生だった。どうせ死ぬなら、自らの手で…

そう思い、舌を噛み切ろうとした、まさにその時だった。

彼女の声が聞こえたのは。

「あら、随分と楽しそうなことをしてるじゃない？私も混ぜてくれないかしら？」

私にはその時、彼女の背中にあった蝙蝠のような羽が、天使の羽のように思えた。

—————

side デイオ

どうも皆さん。デイオです。

今日は、何をしているかというと…

「お兄様！次はどうするの？」

「次は、卵を混ぜてくれないかな？」

「わかった！」

フランと料理をしています！

フランが料理の本を読んで、作ってみたくなったそうです。

なので、簡単なオムレツを作っています。

おかげさまで、とつてもかわいいフランのエプロンが拝めてます。眼福ですはい。

本当は、レミリアも来て欲しかったのですが、何やら散歩に出かけるとのこと。邪魔をしてはいけないので、妄想でカバーしてます。

∴レミリアのエプロン姿、見たかったなあ（・ω・）

「できたあー！」

「よく出来てるじゃないか。じゃあ、食べようか。…ん？」

お！私のリーダーにレミリアが反応した！帰ってきたかな？

ちなみに、この妹リーダーは半径200メートル以内なら正確に、500メートル以内なら大雑把にわかります。これくらい、兄なら出来て当然ですよね！

「ただいま！」

「おかえり、レミリア…!？」

緊急事態発生。

俺の妹が、血まみれの女の子と一緒にやってきました。

…なあにこれ？

—————

side???

あの後にこの子、いえ、レミリア・スカーレットは、家に招待してくれるようだ。あの男たちは…よく風が通りそうな穴が、胸に空けられた、とだけ言っておくわね。

「さあ、パチュリー…ここが私の家よ…みんな優しいから、ゆつくりしていきなさい！」
…なんだかともなく大きな屋敷があるんだけど。しかも、やけに真っ赤で、目に痛い。

「さあ、入って入って！今、お兄様たちがオムレツを作っていると思うわ！」

「ちよ、ちよつと、わかったから押さないで！すぐく転びそうだから！」

すぐくテンションが高いわね。それよりも、今お兄様つて言ったわね。他にもいるのね。てつきり、同じようにみんな外に出ると思っていたのだけど。

「ただいま！」

「おかえり、レミリア」

ツ!? いつの間に!?

全く気づかないうちに、私の目の前には男が立っていた。

身長はとても大きい。髪は金髪で、服は黄色が中心の、見たことがない格好をしている。そして、なんとというか、こう、オーラ? のようなものが凄まじく感じる。レミリアがああの際に見せたくらいのものを、上回っている感じがする。何者? …父親かしら?

「レミリア、その子はどうしたんだい? 怪我をしているじゃないか。」

「この子はパチュリーよ。散歩していたら、襲われていたの。あとそれと、これは大丈夫よ、お兄様。返り血だから。心配ないわ。」

うそっ?! これで兄なの!?! なら、お父さんはきつともつとすごいのかしら。

「違うよ、レミリア。その子の服にかかったのは他の人の血ということにはわかる。でも、裸足だから足を切っているだろう? 擦り傷も多いじゃないか。森の中でも走っていたのかい?」

す、すごい観察眼ね。ほとんど合ってるじゃない。

「あら、そうだったの? ごめんなさい、パチュリー。じゃあ、怪我の手当てをしてから、ご飯を食べましょ?」

ふう、美味しかった。あのお兄さんが作ったらしいけど、ふわふわだった。最初は血が入ってるんじゃないかと思っただけど、どうやら手当てをしている時に作ってくれたらしく、血は入っていないらしい。

それと、レミリアの妹にもあったわ。フランドールという子だったけど、レミリアに似た、可愛い子ね。

…なんでお兄さんとはあんなに違うのかしら。共通点が金髪しかないのだけど。

「それじゃあパチュリー、どうしてあなたはあんなことになっていたの？」

…やっぱり聞かれるわよね。黙っておくのも、ここまでもてなされたんだから失礼よね。

「魔女だからよ。」

「魔女？あなたが？魔力は確かに多いけど、霊力もあるじゃない。」

「まあ、そうなるわね。本当は魔法が使えるだけの、魔法使いよ。」

「じゃあ、なんで…「魔女狩りだな？」お兄様？魔女狩りってなに？」

「魔女狩りというのは、魔女または妖術などの被疑者に対する訴追、裁判、刑罰などのことを言うんだ。もともと、妖術を使ったと疑われる者を裁いたり制裁を加えることは古代から行われていた。しかし、15世紀には、悪魔と結託してキリスト教社会の破壊を

企む背教者という新種の「魔女」の概念が生まれるとともに、最初の大規模な魔女裁判が興った。そして、16世紀後半から17世紀にかけて魔女裁判の最盛期が到来したんだ。」

「あら、よく知ってるのね？」

「少し前にね、興味があつて勉強したんだ。」

「へえ。まあ、今お兄さんが言った通りね。要するに、『魔法使えるから処刑しよう』ってことよ。私は逃げてきたんだけど、おかげさまで、何もかも失ったわ。」

「ふーん」

ちよ、ふーんってなによ！ふーんって！あなたが聞いたんじやない！なにその素っ気なさー！

「じゃあ、私たちと家族になりましょうよ！」

「…はい？」

「だーかーらー、家族になりましたよって言ったの！」

…この子はいきなり何を言い出すんだらうか。

「家族もなにも、私たち赤の他n「友達でしょ？」…え？」

「私、仲良くしたい子しか家には呼ばないの。この意味がわかる？」

…この子は、会った時からすでに友達のつもりでいたの？

「…プツ。フフフ、アハハハハッ！お腹痛いわ！」

「ちよつと、笑わないでよ！恥ずかしかつたのに！」

「ごめんなさい、おかしくつて、つい…フフツ。そうね。もうすでに友達だもの。助け合うものよね、レミイ。」

「れ、レミイ？」

「あら、友達だから、あだ名をつけてあげただけよ？お気に召さなかつたかしら？」

「ううん、そんなことないわ！いいわねそうゆうの！そうね、ならパチユリーは…パチエー！…これからよろしくね！パチエー！」

「ふふ、よろしくね。レミイ、フラン、あと…」

「デイオだ。」

「デイオさん。本当にいいのかしら？迷惑にならない？」

「大丈夫だ。こんなところにくるようなヤツは、マヌケか、死にたがりしかこない。あとは、私と仲のいいやつくらいだな。それに、一人くらい増えても、親は逆に大喜びすると思うぞ？」

「…それってどういうこと？」

「フフ、帰ってこればわかるさ。頑張ったまえ。」

「…？」

「そんなことよりパチエ！家を一緒に回りましょう？案内したいところがいっぱいあるの！」

「お姉さま！フランも、一緒に行く！」

《帰ってくるまでの時間を消し飛ばす！キング・クリムゾン！》

side デイオ

「ただいま」 「ただいま」

「おかえりなさい。お父様、お母様。」

「いや〜集会めんどくさいわ〜もうさ、やめてもいいと思わんか？なあ、デイオ？」

「あらあら、余計なことをぬかすと、その口を閉じてもらいますよ太陽光をブツパしますよ。？」

「集会つてさ、すごい大事だよね！」

いつも通りだな。さて、伝えてやるか。

「レミリアが、大事な話があると二人を呼んでましたよ？」

「なにっ!? つ、ついにレミリアにも男が!? 大変だカルナ! ついに娘がよm 「あなた？」 はいいしませんでした。わかりましたので、どうかその手にしまっている太陽光は出さな

いでください。」

sideパチユリー

さて、レミイのお父さんたちが帰ってきたみたいね。…一体どんな人なのかしら。

コンコン ガチャ

「レミリア、お話とは何かな?」

え? お父さんは小さくはないけど、大きくもないわね? 175くらいかしら? 髪の色は、レミイと同じ黒だけど…まさか、お母さんが大きいのかしら?

「ふふふ、楽しみね♪」

えっ!? 若っ! というより、ちいさっ! すごくレミイたちに近いけど、というか同年代にしか見えないんだけど!

…なんでディオさんだけはあんなに違うのかしら?

「あのね、お父様。お友達を住まわせてあげてもいい?」

「なっ、お友達イ!?!」

やっぱり、驚かれてるじゃない。住まわせてもいいなんて、すぐには言えないわよ。

「ついに…ついにレミリアにもお友達が!!なかなかなできないから心配したが、ついに、ついに—」

「ふふ、よかったですね?あなた。」

驚くところそつち!?

「あなたの名前は?」

「パチュリー・ノーレッジです」

「あらあら、いい名前ね」

えっ、スルー?

「あの、本当にいいんですか?」

「グズ、もちろんだとも。きつと何かあったんだろう?そんな子を見放すなんてことは、

一人の親として許せんよ。」

…優しい人なのね。深く聞かないってことも、そこに入っているのかしら。

「これからよろしくお願いします。」

「もちろん!新しい家族として、歓迎しよう!」

「はい。改めて、よろしくね、レミイ」

「よろしくね!パチエ!」

さつき私は、つまらない人生とか思っていたけど、そんなことなかった。だって、こ

んなに素晴らしい出会いがあるんだもの。

「ふむ…」

確かに、小さいまままだときついよな…それに、ちよつと（紳士たちの）会合もあるし、ちよつどいい。

「いいだろう。ちよつど他に用事があるから、遅れるかもしれないけど、構わないだろう?」

「いいわよ、どうせ研究で起きているから。」

「ならいいのだが…少しは寝るんだぞ? パチュリーは人間なんだから、無理はよくない。」

「うっ…はーい、わかったわよ。」

—————

さて、行こうかな。

今日は…人間辞めた時の服でいいか。

荷物持ったし、さて「お兄様? 荷物をまとめて、外に出る服を着てどうしたの?」「どこかいくの?」

「レミアアとフランか、少し買い物に行こうと思ってね。ちよつと出かけてくるよ。」

「フランも行く!」「なっ、なら私も!」

えっ?! いや、ダメだ。あの紳士姿態たちが、うちの妹たちを見たら語り合殿いが始まる! さ

すがに、フランにそんなものをみせるわk 「ダメ?」

「よし、フラン。一緒に行こうか。」「うん!」

まあ、もし語り合あいになったとしてもぶつこr…ゲフンゲフン、ちよつと永遠に静かにさせればいいか。もし、手を出そうものならピーぶつこせば手っ取り早いし。

—————

さて、街に来ました!

街っていいですね。東京の中心部とは違った、人の賑やかさに溢れてて! 今も夜ですけど…

「あい、らっしやーい!」

「今なら安いよっ! さあ、買った買った!」

「親父! このりんご高すぎだ! もつと安くしろ!」

「ふん、たかがりんごと思うなよ? クソガキ」

「俺の話の聞けえええええ!!」

「デイオは、この街のどこかにいる。」

「どうだ、俺と一緒にやらないか?」

「ああ、いいつすね、」

相変わらず賑やかだな! この賑やかさは、いつ来てもいいね!

「お兄様!あれみてあれみて!」

「すごいよ!人間が、目から光出してる!」

そして、見慣れないものに大興奮の二人。ああ、こころがびよんぴよんするんじゃないか、今遠くの山に穴空いたような…まいつか!

…眼から光?うわっ!?!ほんとだ、なんだあのインド人!?目からビーム出してるぞ!?!てか、今遠くの山に穴空いたような…まいつか!

「お兄様!あそこ行きたい!あのお店!」「フランも、フランも!」

ぬいぐるみのお店か。おつ?ちようど近くに服屋もある!

「よし、いいぞ。ゆっくり見てきなさい。ただし!私は近くの服屋さんに行くから、この三つは守ること。ひとつ、お店からは離れないこと。ふたつ、二人で一緒にいること!みつ、怪しい人にはついていけないこと!いいね?」

「大丈夫よ!お兄様!なんとたって私はお姉様なんですよ!レディとしてできて当たり前だもん!」

「おにいさまは安心して行ってきてね!」

「そうか、では行ってくる。いい子にしてるんだぞ?」

「任せて!」

でも、どこにいるかわかんない! ああーもう! どうしたらいいんだ! 素数、素数数えよう! 2、3、5、…

ハッ!? そうだっ! あいつらだ! あいつらに頼もう!

「会長おせーなーいつもなら一番乗りなのに。」

「なんかあつたんかな、用事とか」

「いやいや、会長はみんなの都合が合うように決めてるんだぞ? そんなことあるかよ。」

「だよなあ…」

ドツツツカアアアアアン!

「な、なんだ!?!」「熟女連合の攻撃か!?!」「いや、敵影は見えないぞ!?!」

「ケホッ、」

「か、会長! 一体どうしたんですか!?!」「まさか、連合に…!」「野郎、ブッコロシテヤラー!?!」

「緊急事態だ。今すぐに会員全員を大講堂に集めてくれ。連合の連中に妹が連れ去られた可能性がある。」

「さて、今日は会議は中止だ。聞いたかもしれないが、諸君らにしてもらいたいことがある。だが、その前に諸君らに話しておきたい。そもそもなぜ私がこの会を創り上げたのか。話しておこう。

諸君 私は幼女が好きだ

諸君 私は幼女が好きだ

諸君 私は幼女が大好きだ

楽しんでいる幼女が好きだ

笑っている幼女が好きだ

遊んでいる幼女が好きだ

歌っている幼女が好きだ

駆け回っている幼女が好きだ

ご飯を食べている幼女が好きだ

眠っている幼女が好きだ

私を呼んでくれる幼女が好きだ

頑張る幼女が好きだ

平原で 街道で

山中で 草原で

凍土で 砂漠で

海上で 空中で

泥中で 湿原で

この地上にいるありとあらゆる幼女が大好きだ

困っている幼女に声をかけて、助けを求められたら、助けてあげるのが好きだ

幼女がこちらを見て微笑んでくれた時など心がおどる

幼女達が仲良くしているのが好きだ

いじめっ子のグループに、幼女達が団結して返り討ちにした時など胸がすくような気
持ちだった

みんなで集まって話している幼女達が好きだ

ひとりの転んでしまった幼女に寄り添う幼女の様など感動すら覚える

転んでも泣かないで笑いかけてくる様などはもうたまらない

逆にあまりの痛さにこちらに甘えてきて、ひつついてくるのも最高だ

知らない幼女のために、高いところのものを取ってあげたり、迷子を無事に届けたときなどの後に『ありがとう!お兄ちゃん!』と言ってくれた時など絶頂すら覚える

幼女と遊んでいるときに滅茶苦茶にされるのが好きだ

必死に守るはずだった幼女が、自らの手で泣かせてしまった時はとてもとても悲しい

ものだ

寝ている時に幼女に押し潰されて、仕返しにこちよこちよをするのが好きだ
見知らぬ男に騙されて、幼女がひどいことをされているのは屈辱の極みだ

『か、会長…』

諸君 私は笑顔を太陽の様な幼女の笑顔を見ている

諸君 私に付き従う紳士の会諸君

君達は一体何を望んでいる？

更なる笑顔を見たいか？

純粹な、美しささえ感じる笑顔を見たいか？

いたずらっぽく、楽しそうな可愛い笑顔を見たいか？

『(。△。)○ミ。ようし、よ！！

(。△。)○ミ。ようし、よ！！

(。△。)○ミ。ようし、よ！！』

よろしい ならば私の頼みを聞いてくれ。

我々は満身の力をこめて今まさに振り降ろさんとする握り拳だ

だがこの暗い闇の底で半世紀もの間幼女を愛でてきた我々に一人の幼女である私の、

いや私たちの妹を失うなど絶対にあつてはならない！

大戦争を!!

一心不乱の大戦争を!!

我らはわずかに一個大隊 千人に満たぬ男子に過ぎない

だが諸君は一騎当千の紳士だと私は信じてやまない

ならば我らは諸君と私で総力100万と1人の紳士の集団となる

幼女を忘却の彼方へと追いやり眠りこけている連中を叩き起こそう

髪の毛をつかんで引きずり降りし眼を開けさせ現実を思い出させよう

熱女連合
連中に幼女の素晴らしさを思い出させてやる

熱女連合
連中に我々の幼女への思いを思い出させてやる

天と地のはざまには奴らの哲学では思いもよらない事があることを思い出させてや

る

一千人の紳士達で世界を幼女愛にし尽くしてやる

そうだ あれが待ちに望んだ幼女の光だ

私は諸君らを約束通り連れて帰ったぞ あの懐かしの戦場幼女のいる場所へ あの懐かしの戦争幼女との遊び

へ

『デイオ様! デイオ! 会長! 会長殿! 紳士の会会長殿!』

そして我々はいよいよ大洋を渡り丘へと登る

紳士の会各員に伝達 会長命令である

さあ 諸君

地獄を見せるぞ

『うおおおおおおお！』

さあ、奪還戦聖戦を始めよう

sideレミリア

どうも皆様。レミリアです。

今私は、フランとともに誘拐されました。おまけに変人に。

「いいか！今日連れ去ったのはあそこの会の会長の重要人物だ！これで奴らを抑えて、奴らに熟女の素晴らしさを叩き込んでやれ！」

『。▽。○◇。熟女！（。▽。○◇。熟女！（。▽。○◇。熟女！』

…ダメだこいつら、早くなんとかしないと

「おねえさま、じゆくじよつてなあに？」

「フラン、世の中には知っていいことと悪いことがあるの。知らなくてもいいわ。」

フランにこんなもの見せたくないけど、隣にリーストと裸マツチヨの人間がたくさ
んいるのよね…マツチヨはまだしも、リーストは下手に動いたら浄化されそう。

「報告! 正面より、奴らが来ます!」

「よし、では迎え撃つぞ! 人質をしつかりと見張っておけ!」

「了解!」

仕方ない、おとなしく従いましょう

—————

side デイオ

ババババババツ! キン! カン!

ヨウジヨノアイヲオモイシラセロー!

カエリウチニシテヤレ!

トオツゲエキイ! ウオー!

ブツツブセ!

ベネット、ジュウナンカステカカツテコイ

テメエナンザアコワカネエ! ヤロオブツコロシテヤラア!

センスダ、クエ

カリツ! ビヤアアアウウマア!

無事こちらが押しているな。さて、早く二人が見つからないか…「会長! 特攻隊よ組三番隊からの連絡で、二人保護したそうです!」

「よくやった！ほかにあるか？」

「はい、戦闘隊う組とじよ組が、七割程の制圧が完了したとのこと！」

「わかった私は少し迎えに行つてくる。頼んだぞ」

「わかりました。」

では、迎えに行こう

「二人とも、無事k…」

…なんだ、これは。

「どうゆうことだ！貴様らあ！」

ふざけるな。何してるんだ！

「か、会長、違います。僕らは何もしてません！」

「じゃあどうしてこうなるんだ！言ってみろ！」

なんでレミリアたちが泣いてるんだ！

お前からマジでふざけんなよ？なんで泣いてるんだ？アアン!？」

「ち、ちがうんです！」「僕らが無事なのを確認して、制圧してから、トンペティが彼女達に声をかけたんです！」「そしたら、あいつ顔に凄みがあるからかわかんないんですけど、金髪の子が泣いてしまつて！」「僕らがショックを受けてたら、もう一人の子も泣き

出してしまったんです!」

「…要するに、貴様らが泣かせたんだな? 「いやちg」わかった。とりあえず貴様ら全員ぶちのめす! 世界! 時よ止まれ!」
ザ・ワールド

『ぎゃああああああ!』

「レミリア! フラン!」

「ヒック、お兄様…?」

「おにいさま! ヒグツ、あいたかったあ! 変なおじさんのかおがこわかったのお!」

「無事でよかった、怪我はないかい?」

「グス、大丈夫よ、お兄様。怪我はしてないわ。」

「そうか…無事でよかった…すまない、私になしつかりとみh「仕方ないわよ、お兄様。…なぜだ?」

「だってお兄様、店員の人に言っけしてたし、それに誘拐された時に店員さんもいなかったもの。」

「そうだよ! フランも、あの人たちがいい人って思ったのが悪いの! だからおにいさま

は悪くない！」

「…そうか。でも、私が見張っておけば済んだのだ、そこはしっかりと謝って」もう、無事だったんだしいいじゃない、それよりお兄様、お腹が空いたから、うちに帰りましょう？」…そうだな、よし！じゃあ帰って夕食にしよう。」

『会長、俺らのこと忘れてない？』

あ!やせいのもんばんがあらわれた!

どうも。デイオです。

今私は街にきました。

明日はいよいよ素晴らしい日がやってきます。

みなさん、何の日だと思います?

会合の日? NO。何が好きであんな野郎共のどこに行くんですか。

もちろん大事な奴らですが、あんなネクタイと靴下は厳選するような紳士と過ごすのは素晴らしいとは言えません。

何かの休みの日? NO。

主人はあの親父イなので、今はすることないですね。

そもそも年中夏休みみたいですもの。なんでホワイトなんでしよう!

では何の日か? それはもちろん祝う日ですよ。

え、なにを祝うかって?

レミリアのお誕生日会に決まってるんだろ！

今年もやってみりました、年に2回の素晴らしい日が。

レミリアとフランのお誕生日：そう、あの2人にあつた記念日のうちの一つでもあるんです！

というわけで、毎年恒例となっているお誕生日ケーキをもらいにきました。

毎年ケーキとはある方法で入手しています。

そのケーキ、味はすごく美味しいんです。ケーキの見た目もいいし、飾り付けも完璧！ケーキは素晴らしい！というより、マジで悪人を何人か更生させるせられそうなくらいうまくいんですよ。

実際この前、DQNが来ていたんですが

『うめえ…うめえよ…』

『ううう…母ちゃん…』

とか言わせるほどです。…宝具か何かか？

~~~~~

「ペート、いるか？いつも通りケーキをもらいに来たんだが。」

ん？あいつまたいないな。つたく、いい加減変えたらどうなんだ。

どうせまた奥でアレしてるんだろ。

「入るぞ。」

「ああ、くいいつつね、このライン、素晴らしくウツクスイ…そしてなんて柔らかみのありそうな太ももなんだ、ぜひともMyson♂をサンドイッチして…デユフフフww」

「おお、ペート?」

「フオーwwこのちっP…って会長!どうしたんですか?」

「いつも通りケーキを頼むよ。今日は妹の誕生日なんだ。」

「ああ!わかりました。用意してありますよ!」

「それにしても…まだ変えるつもりはないのか?」

「いや、ホントにどうして愛で方だけ理解してもらえないんだ…」

「だいたいわかったのではないか。」

「そう、こいつは恐ろしい事に、」

「ペド野郎なのである。」

私は真なる紳士変態を目指すものとして、紳士の掟は守らなければならないと思う。

『YESロリータ、NOタッチ』

紳士諸君なら一度は聞いたことのある、COMICLOのキャッチコピーである。

だからこそ少女とは愛でるもの!! 性の対象として見たりあまつさえ手を出すな  
 ど・・・紳士の風上にも置けん行為だ!! 憎むべきは一部の卑劣な犯罪者のみ!! ロリ  
 コン無罪! 紳士無罪!!

いつも心に『 YES    ロリータ    NO    タッチ    』!!!!

ふう、少し興奮してしまった。

まあ、別に悪いというわけではない。

人それぞれなんだから、それを直せというのは俄然無理だ。  
 だからこそうちの会は基本自由なのです。

「全く…いい加減に変えたらどうなんだ、この前も私が話したじゃないか。幼女とは、遠くから愛でるものだ。お前は確かに愛しているのかもしれないが、その愛したものに嫌われては元も子もないぞ?」

だ が  
 認 め た わ け で は  
 な い

「チツチツチ、甘いです、甘々ですよ、会長。真の紳士なら、紳士であることの誇りを持っているからこそ、あらゆる危険行動によるを乗り越えられるんだ、そう言っていたのは会長じゃないですか。」

「いや、確かに危険を乗り越えるのが真の紳士だとは思いますが、愛を表現の仕方に…」

キング・クリムゾン!

この会話(2時間)の時間を消し飛ばす!

~~~~~

「おっと、つい話し込んでしまった。それよりもケーキはできてるんだよな?」

「もちろんです。プロですから。」

「気に入った。○す殺のは最後にしてやる。」

「え!?!俺殺されるんですか!?!」

「冗談だよ、ケーキを頼む。」

「ふう、よかった。会長が言う(インパクト強すぎて)冗談に聞こえませんよ…はい、いつも通りのケーキです。」

「ありがとう。また今度も頼むよ。」

「上の妹さんの誕生日なんですよね? ハア…俺も妹がいたらなあ…」

「お前は襲うだろう。」

「いや襲いませんよ！せいぜい愛し合うくらいですから！」
「その時点でアウトつてことに気付こうか」

~~~~~

さて、ケーキも手に入つたし、家に帰るか。

…しまったな、話し込んでいたせいでプレゼントをまだ買ってない！

さて、どうしようか…

やはり買うなら普通にぬいぐるみか？

『ありがとう！お兄様！このくまさん、とっても可愛い！』

よし、ぬいぐるみに…いやまてよ、

『お兄様！この服どうしたの？』

『ふふ、誕生日プレゼントさ、開けてごらん？』

『………わあ！綺麗な服！着てみてもいい？』

『もちろん、レミリアのものだからいいよ』

『…どうお兄様！似合ってる？』

『似合つてるとも、大人のレディだね』

「これもいいなあ！」

むふ、どっちにしようかな…「あなたはデイオ・スカーレット郷ですよね？」

ん?誰だこの人。フードかぶってよく見えないな…

「確かに私のことだが…どうかしたのかね?」

「…ツ!失礼します! (ゴウツ!)」

「なにつ!」ゴスツ!

な、なんじやいきなり、かなりいいパンチをしてきたんだけど。

危なかったなあ…まともに食らったらかなり痛かったな。

…あれ?避けたのになんか当たった気がする…!!!

な、なんてことだ…!

け、ケーキが…!

~~~~~

side???

私は生まれてきて、自分の置かれている環境に絶望した。

弱肉強食。

恐ろしい話で、弱いものはすぐに殺されて、強いものしかいなくなっていた。

だからこそ私は戦う術を求め続けた。

まずはじめに力を鍛えた。

力を鍛え、次は技を求めた。

技を極め、次は心の強さを求めた。

このようにして戦う術を身につけていった。

そして頂点に立てるようになる。

しかし、頂点に立つと違う恐ろしさがあるのだ。

孤独。

たった2文字だが、これが恐ろしい。

あらゆるものに恐れられて、近づかれなくなる。

恐怖を持つ存在だったのに、いつの間にか恐怖を与える存在になっていた。

そして、この存在が多くのもを奪った。

かつての家族のような存在は、他の妖怪の八つ当たりで襲われた。

友達私の元を去って行き、ついには1人もいなくなった。

そして周りの目も変わっていくのだ。

実に恐ろしかった。恐怖をなくすはずだったのに、なくならず、むしろ与えている。

この事実能耐えられなかった。

だから私は、過ごした場所を捨て、新しい地へと向かった。

自分を認めてくれるような、強者のもとへ：

~~~~~

まず初めに、拳法の達人のもとに向かった。

その人間は技は私と同じくらいだったが、力が足りなかった。

普通に倒せてしまった。

次に、腕っ節に自信のある山のぬしのもとに向かった。

力はとてつもなかったが、技術がなかった。

打ち倒すと、すぐにヘコヘコしだした。そんなつもりはなかったのに……

そんな風にして、風の噂を頼りに様々なモノに挑んだ。

たまには相手になるものもいたが、所詮その程度。

私が求めるような強者は現れなかった。

そんなある日、ある人物からとある噂を聞いた。

その人曰く、西の方角の国に、人外と、人間が集まった会合があると。

その会の会長が恐ろしいほど強く、敵対組織に1人でいるところを襲われ、100

人を相手にしたが一瞬で倒したという。

これにはさすがに驚いた。

私は100人に襲われても対処はできるが、一瞬なんて無理だ。

もし本当なら、期待できるかもしれない。